拝啓酷暑の候御尊体
愛叔父上様の御病氣如
何御尊体叔母上様
三御揃如何御暮し之旨
拝承御国元之小生
義は過る横村小兼太様
帰郷の節東京迄の経過
を傳言致置候間既に
御承知の御事と存候ば
兵糧を要する上東京
大学教授河合博士の診
察を受度と同じく視神
経萎縮と所謂ヒステリ
ヒヤなるものに医療の見込
無之との診断を受け
申候されば今や兵糧
をのみ求めとして療養
致す他無之兵糧と
して東京に帰在する必要
も無之ゆえ速に郷
引上け当分三宅方に
寄宿療養致す
つもりに候涼風立つ頃に
帰宅致さむと存候も
毎も大半田出養以来
より胃を痛め長途旅
行の為此秋の行動に
痛みを感ずる事甚
に苦しく当分療養致
す所存御尊体先
日中御見舞奇遇況
御報知迄如此御尊体
筆まめ御両所様の
御健康祈上候早々
前
大正九年八月三日
大塚恭一郎
石丸勝一様
机下